

各位

御承知のように JSC が5月29日にパブリックに公表しました設計図書一式を入手しましたので榎事務所において分析を行いましたのでその要点を御説明したいと思います。

1. 巨大屋根架構

周知のようにこの巨屋根架構は2本の大きな鉄骨トラスを中心につくられています。我々は初めてこの架構の断面を図面からしることが出来ましたが、足元で長さ10m幅平均8mの巨大なものです。これは図1.に示してありますが、断面は有に80㎡の2LDKのアパートが入る大きさです。**その総容積は地上部分だけで2LDK 180個分に相当するものです。**

更に地下部分、基礎、そして屋根を覆う他の副材に必要な鉄骨、コンクリートの総量を考えると、明らかに16日間或いは年間50日位しか利用がないこの架構物にどうしてこんな無駄に素材とその複雑な加工費を支払わなければならないか、また人口縮小の東京において維持していかなければならないか大きな疑問が残ります。

2. そして一部開閉式屋根構造にしたために a) 開閉可能な部分に使用が検討されているC種膜材は金属屋根に比較して遮音性、耐熱性も格段に低いことは明らかであり、A、B種の膜材と比較してもC種は7～10年しかもたないとのことです。一体地上70mに近いところで簡単に取換えが出来るのか。可動式屋根はこれまでの世界、日本国内の例をみても小さなものでも決して成功して居りません。
 - b) 又、音響性能についても特に遮音性は申し訳程度しか期待出来ないという専門家の証言があります。
 - c) 更に重要なことは、一部しか開くことの出来ないこの屋根システムでは十分な芝生の育成が行えないことは、殆どすべてのスポーツ関係者が指摘しているところです。
 - d) 又、有蓋競技場に、複合施設にした為に生ずる膨大な建設費、特に年間45億円以上にのぼる維持費（これは年々増加します）に対する誰もが容認し得ない無責任な収入予測がされています。

3. 建物周縁を歩く人々がこの建物に持つ印象

私は当初から建物は、その足元に立ってみて始めて、視覚、触覚も含めて身体的にその建物から受ける印象が得られるものであり、絶対に俯瞰したものから得られないといってきました。

今回、詳細な地下1階、1階の平面図として立面、断面図が得られたので、実際にこの建物が歩道、或いは広場からどうみえるか分析してみました。

図3の壁面が赤線のところは、殆ど壁であり、透明なガラスの出入口（青線）も、年間310日は閉鎖されている状態です。

そこには暗いアーケードと、無表情に30m~40mの高さで岐立するコンクリートの壁があるだけです。若干の樹木は残りますが、それも地下工事等を考えれば、植替えにせざるを得ず、現在の高さにするには数十年かかると思います。

特に夜間は直接車道を通して敷地内部を監視することが出来ない部分が多く、楽しくないどころか危険な場所も多々見受けられます。その管理をどうするか、ホームレス対策も含めて。

確かに西側の2階の広場は天気が穏やかな時には広場に面したカフェから眺望を楽しむことは出来ても、そうした僅かな楽しみの為に何千、何百億円の費用をかけられるとは考えられません。或る委員75mから5m低くなってバランスがよくなったと言っていますが、我々建築や都市デザインを専門とするものにとっては全く不可解な言動です。

— 結論 —

この分析から2つのことがはっきりと云えると思います。

1. 技術、性能、コスト的に問題のある有蓋（有害）施設は、今回無蓋にすべきである。有蓋施設に諸悪の根源があると考えからです。
2. 次の50年~100年この周縁を歩く、或いは自転車で日常的に通る都民、訪問者の為にどのような足下、環境が最善か、その為には建築面積、そして一部仮設にしてオリンピック後のヴォリュームを減らすことであり、そこで極力減少した維持費に見合う収入源を考えることが必要だと思えます。

そうでなければ、現在案を実現しても、オリンピック以後、誰もその施設を愛することもなく、単なる巨龍に似た沈黙の土木架構物を50年~100年都民がお守りしていかなければならないという世紀の愚挙として歴史に残るだけでしょう。

榎 文彦